96　**D**

◎ 指示があるまで開かないこと。

(平成14年3月17日　9時20分～11時50分)

注　意　事　項

1. 試験問題の数は60問で解答時間は正味2時間30分である。
2. 試験問題の持帰りを認めない。
3. 解答方法は次のとおりである。

(1) 各問題にはaからeまでの五つの答えがあるので、そのうち質問に適した答えを一つ選び、次の例にならって答案用紙に記入すること。

(例) 101　県庁所在地はどれか。

a　栃木市
b　川崎市
c　神戸市
d　倉敷市
e　別府市

正解は「c」であるから答案用紙の

101 ⓐ ⓑ ⓒ ⓓ ⓔ のうち ⓒ をマークして

101 ⓐ ⓑ ● ⓓ ⓔ とすればよい。

(2) 答案の作成にはHBの鉛筆を使用し、濃くマークすること。

良い解答の例……●（濃くマークすること。）

悪い解答の例……⊙ ⊖（解答したことにならない。）

(3) 答えを修正した場合は、必ず「消しゴム」であとが残らないように完全に消すこと。鉛筆の色が残ったり「⊗」のような消し方などをした場合は、修正したことにならないので注意すること。

(4) 1問に二つ以上解答した場合は誤りとする。

(5) 答案用紙は折り曲げたりメモやチェック等で汚したりしないよう特に注意すること。

1　35歳の3回経産婦。妊娠35週。昨夜就寝中に軽度の性器出血を認め来院した。膀胱充満を確認後、腹部超音波検査を施行した。その下腹部正中矢状断写真(別冊No. 1)を別に示す。

考えられるのはどれか。

a　子宮筋腫

b　前置胎盤

c　前置血管

d　前期破水

e　臍帯脱出

別　冊
No. 1　写　　真

2　25歳の男性。多弁・多動を主訴に家族に伴われて来院した。元来、社交的で人情味があり、親しみやすい好人物であった。3週前、仕事上の失敗で上司に注意され、責任を強く感じていた。その後、「眠くならない。眠らなくても疲れない。」と言い、深夜まで読書をしたり、部屋を片づけたりしている。職場でも、多弁で声が大きく、仕事に関係ない話題を同僚に話しかけるようになった。上司が注意すると、不機嫌になって大声で言い返したり、書類を破り捨てたりする。診察時、意識は清明、気分は爽快で、話の内容は理解できるが、しばしば話が脱線し、語呂合わせや冗談を言ったりする。「自分は病気ではない。入院は断固しない。」と主張する。常用薬はない。

この患者で正しいのはどれか。

(1)　思考障害が認められる。

(2)　病識は保たれている。

(3)　妄想が認められる。

(4)　睡眠障害はない。

(5)　病前性格は循環気質である。

a　(1)、(2)　　b　(1)、(5)　　c　(2)、(3)　　d　(3)、(4)　　e　(4)、(5)

3　27歳の男性。物事を何度も確認しないと安心できないと訴えて来院した。高校時代に字を書いても計算をしても、間違いの有無を調べ続けるようになった。その後、さらに対象が広がり、鍵やガス栓の点検を何度も繰り返すようになった。このため何事にも時間がかかり、本人も疲れ、職場にも毎日遅刻するようになった。治療を強く希望している。

適切でない治療はどれか。

a　行動療法

b　認知療法

c　森田療法

d　抗うつ薬投与

e　電気けいれん療法

4　58歳の男性。頑固な不眠と日中の眠気とを主訴に妻に伴われて来院した。2年前から熟睡感がないと訴えるようになり、日中の疲労感が強く、よく居眠りをするようになった。職場でも仕事の能率低下に気付かれている。妻によると、2年前から夜間のいびきがひどく、時々、呼吸が止まった状態になるとのことであった。身長160 cm、体重90 kg。咽頭には異常がない。抑うつ気分や不安を認めない。夜間の睡眠ポリグラフ(**別冊**No. 2)を別に示す。

この患者でまず行うべき治療法はどれか。

a　イミプラミン投与

b　ベンゾジアゼピン系薬投与

c　メチルフェニデート投与

d　持続的気道陽圧法

e　軟口蓋の外科手術

別　冊
No. 2　図

5　8歳の男児。コミュニケーションがうまくとれないことを主訴に母親に伴われて来院した。乳幼児期の運動発達は良好であったが、乳児のときからあやされて喜んだりすることがなく、6歳まで言葉がなかった。最近は日常会話はなんとか可能だが、相手の話しかけに対するおうむ返し〈反響言語〉が目立ち、会話が成立しがたい。そのため、友達がつくれずに孤立している。興味や関心の対象が限られ、それに頑固に執着する傾向があり、決まった遊びをいつまでも繰り返したりする。生活上に変化が生じると不安がって大騒ぎとなる。児童相談所で行った知能検査でIQは59であった。

この患児で考えられるのはどれか。

(1)　人格障害

(2)　行為障害

(3)　多動性障害

(4)　知的障害

(5)　広汎性発達障害

a　(1)、(2)　b　(1)、(5)　c　(2)、(3)　d　(3)、(4)　e　(4)、(5)

6　36歳の女性。全身の皮疹を主訴に来院した。5日前に感冒薬を2回服用した。翌日から皮疹が出現し全身に拡大してきた。顔面の写真(**別冊**No. 3)を別に示す。

この病態で**みられない**のはどれか。

a　発　熱

b　関節痛

c　結節性紅斑

d　外陰部びらん

e　視力障害

別　冊
No. 3　写　真

7　36歳の女性。両足の皮疹を主訴に来院した。病変部からの細菌・真菌培養は陰性である。右足の写真(**別冊**No. 4)を別に示す。

この疾患と関連の深いのはどれか。

a　慢性扁桃炎

b　間質性肺炎

c　自己免疫性肝炎

d　慢性関節リウマチ

e　慢性甲状腺炎

別　冊
No. 4　写　　真

8　日齢14の新生児。発疹を主訴に来院した。在胎39週、帝王切開で出生した。出生体重3,160 g。日齢11の退院時に両腋窩の皮疹に気付かれ、外用薬が塗布された。しかし、皮疹は次第に顔面、頸部および鼠径部に拡がった。体温36.0℃。呼吸数46/分。脈拍138/分、整。大泉門1.5×2.0 cmで平坦。わずかな擦過により健常皮膚面も剝離する。Hb 12.4 g/d*l*、白血球8,500。CRP 0.9 mg/d*l*(基準0.3以下)。顔面の写真(**別冊**No. 5)を別に示す。

適切な治療はどれか。

a　PUVA療法

b　抗菌薬静注

c　免疫抑制薬静注

d　抗ヒスタミン薬経口投与

e　副腎皮質ステロイド薬塗布

別　冊
No. 5　写　　真

9　65歳の男性。左眼の急激な視力障害を訴えて来院した。視力は右1.2(矯正不能)、左光覚弁(矯正不能)。左の眼底写真(**別冊**No. 6A)と色素静注後30秒の蛍光眼底造影写真(**別冊**No. 6B)とを別に示す。右眼の眼底には異常はみられない。

考えられるのはどれか。

a　急性緑内障

b　Vogt-小柳-原田病

c　網膜剝離

d　加齢黄斑変性

e　網膜動脈閉塞症

別　冊
No. 6　写真A、B

10　3歳の男児。咽頭痛と39.0℃の発熱とを主訴に来院した。胸部聴診で心雑音はなく、ラ音も認めない。腹部は平坦で軟、肝・脾を触知しない。リンパ節腫脹はなく、皮疹も認めない。咽頭部の写真(**別冊**No. 7)を別に示す。

考えられるのはどれか。

a　鵞口瘡

b　手足口病

c　ヘルパンギーナ

d　アフタ性口内炎

e　急性ヘルペス性口内炎

別　冊
No. 7　写　　真

11　32歳の男性。4日前から咽頭痛と発熱とがあったが放置していた。昨日から高熱が出現し、嚥下困難や開口障害を伴うようになってきたので来院した。血液所見：赤血球480万、Hb 13.0 g/dl、白血球13,600。血清生化学所見：AST(GOT) 30単位(基準40以下)、ALT(GPT) 28単位(基準35以下)。CRP 13.6 mg/dl(基準0.3以下)。咽頭の写真(別冊No. 8)を別に示す。

最も考えられるのはどれか。

a　急性咽頭炎

b　腺窩性扁桃炎

c　扁桃周囲膿瘍

d　急性喉頭蓋炎

e　伝染性単核球症

別　冊
No. 8　写　　真

12　48歳の男性。昨夜から頭痛の悪化、嘔吐および意識障害がみられるようになったため救急車で搬入された。1か月前から上顎の齲歯のため鈍痛が持続していた。4日前から発熱、顔面痛および頭痛を自覚していたが放置していた。意識は昏迷状態で項部硬直と右不全片麻痺とを認める。頭部造影CT(別冊No. 9)を別に示す。

この脳病変を最もきたしやすいのはどれか。

a　鼻　茸

b　慢性鼻炎

c　アレルギー性鼻炎

d　鼻中隔弯曲症

e　急性副鼻腔炎

別　冊
No. 9　写　　真

13　28歳の男性。生来健康であったが、1週前から発熱と咳とが続くため来院した。咳は乾性で頑固である。同様の症状を訴えている会社の同僚がいる。体温38.2℃。呼吸数18/分。脈拍80/分、整。胸部聴診では呼吸音の異常は認めない。白血球6,500(桿状核好中球8％、分葉核好中球52％、好酸球2％、単球8％、リンパ球30％)。CRP 8.6 mg/dl(基準0.3以下)。胸部エックス線写真で右中肺野に浸潤影を認める。誘発喀痰のGram染色では起因菌は推定できなかった。

初期治療として適切な抗菌薬はどれか。

(1)　ペニシリン系

(2)　カルバペネム系

(3)　アミノ配糖体系

(4)　マクロライド系

(5)　テトラサイクリン系

a　(1)、(2)　　b　(1)、(5)　　c　(2)、(3)　　d　(3)、(4)　　e　(4)、(5)

14　39歳の女性。2週前から発熱、息切れ及び膿性痰があり、次第に増悪したため来院した。18歳ころから咳嗽と喀痰とがあった。時々血痰と発熱とがあり、その都度、近医で治療をうけていた。体温37.2℃。呼吸数20/分。血圧102/80 mmHg。両側下肺野にcoarse crackles〈水泡音〉を聴取する。血液所見：赤血球410万、Hb 12.1 g/dl、白血球14,800、血小板42万。CRP 4.8 mg/dl（基準0.3以下）。動脈血ガス分析（自発呼吸、room air）：pH 7.39、PaO_2 55 Torr、$PaCO_2$ 46 Torr。胸部エックス線写真（別冊No. 10A）と胸部単純CT（別冊No. 10B）とを別に示す。

考えられるのはどれか。

a　気管支拡張症

b　間質性肺炎

c　肺胞蛋白症

d　肺気腫

e　肺好酸球症

別　冊
No. 10　写真A、B

15　42歳の女性。2日前から発熱と膿性痰とがあり来院した。10年前から咳嗽と喀痰とを認め、2年前から労作時の息切れが出現した。小児期から慢性副鼻腔炎がある。体温37.8℃。脈拍82/分、整。全肺野にfine crackles〈捻髪音〉を聴取する。白血球12,500（桿状核好中球8％、分葉核好中球66％、好酸球2％、単球2％、リンパ球22％）。CRP 10.2 mg/dl（基準0.3以下）。呼吸機能検査：％VC 88％、$FEV_{1.0}$％ 62％。胸部エックス線写真では全肺野にびまん性粒状影を認める。

予想される起因菌はどれか。

(1)　*Haemophilus influenzae*

(2)　*Escherichia coli*

(3)　*Klebsiella pneumoniae*

(4)　*Staphylococcus aureus*

(5)　*Streptococcus pneumoniae*

a　(1)、(2)　　b　(1)、(5)　　c　(2)、(3)　　d　(3)、(4)　　e　(4)、(5)

16　35歳の女性。労作時呼吸困難を主訴に来院した。2年前から咳に気付き、最近息切れが増強している。身長154 cm、体重48 kg。脈拍82/分、整。心雑音はない。下肺野にfine crackles〈捻髪音〉を聴取する。血液所見：赤血球330万、Hb 11.0 g/dl、白血球6,300。血清生化学所見：総蛋白6.4 g/dl、アルブミン4.2 g/dl、LDH 440単位(基準176～353)。免疫学所見：CRP 0.2 mg/dl(基準0.3以下)、リウマトイド因子陰性、抗核抗体陰性。胸部エックス線写真(別冊No. 11 A)、胸部CT(別冊No. 11 B)及び開胸肺生検組織のH-E染色標本(別冊No. 11 C)を別に示す。

この疾患で誤っているのはどれか。

a　女性に多い。

b　再発性気胸が多い。

c　乳び胸が多い。

d　閉塞性換気障害がある。

e　全肺気量が低下する。

別　冊
No. 11　写真A、B、C

17　56歳の女性。胃癌のため胃全摘術を受けた。術後3日目にベッドから立ち上がった際、突然の胸痛と呼吸困難とをきたした。身長155 cm、体重63 kg。体温37.0 ℃。呼吸数26/分。脈拍116/分、整。血圧88/60 mmHg。心基部でⅡ音が亢進し、呼吸音の異常は認めない。血液所見：赤血球350万、Hb 10.5 g/dl、白血球11,000、FDP 15 μg/ml(基準10以下)。血清生化学所見：AST〈GOT〉36単位(基準40以下)、ALT〈GPT〉30単位(基準35以下)、LDH 420単位(基準176～353)、CK 32単位(基準10～40)。動脈血ガス分析(自発呼吸、room air)：pH 7.48、PaO_2 58 Torr、$PaCO_2$ 33 Torr。心電図は右心負荷所見を示す。胸部エックス線写真に異常を認めない。

この病態に関連するのはどれか。

(1)　肥　満

(2)　喫　煙

(3)　心房細動

(4)　気腫性嚢胞〈ブラ〉

(5)　下肢深部静脈血栓症

a　(1)、(2)　b　(1)、(5)　c　(2)、(3)　d　(3)、(4)　e　(4)、(5)

18　72歳の女性。失神発作のため救急車で搬入された。今朝、隣の人と会話中に急に意識を失って倒れた。すぐに気がついたが、病院へ来る救急車の中でも1分以内の意識消失発作が2回出現した。血圧150/72 mmHg。心拍ごとにⅠ音の強度が変動する。来院時の心電図(別冊No. 12)を別に示す。

行うべき処置はどれか。

a　電気的除細動

b　カテーテル焼灼術

c　ペースメーカー植え込み術

d　経皮的冠動脈形成術

e　大動脈バルーンパンピング

別　冊
No. 12　　図

19　9歳の男児。発熱を主訴に来院した。軽症の心室中隔欠損症で経過を観察されている。1か月前に抜歯を行った。2週前から発熱があり、3日前から食欲が低下し、だるさを訴えるようになり、今朝突然に右腰背部痛を訴えた。体温38.6 ℃。胸骨左縁下部に2/6度の収縮期雑音を聴取する。肝は触知しない。脾を左肋骨弓下に3 cm触知する。尿所見：蛋白2＋、糖(－)、沈渣に赤血球多数/1視野、白血球5～10/1視野。血液所見：赤沈80 mm/1時間、赤血球350万、Hb 9.4 g/dl、Ht 32%、白血球14,500、血小板22万。CRP 12.5 mg/dl(基準0.3以下)。

診断に必要な検査はどれか。

(1)　心エコー

(2)　腹部造影CT

(3)　運動負荷心電図

(4)　心カテーテル

(5)　血液培養

a　(1)、(2)、(3)　　b　(1)、(2)、(5)　　c　(1)、(4)、(5)

d　(2)、(3)、(4)　　e　(3)、(4)、(5)

20　64歳の男性。労作時の息切れと胸部圧迫感とを訴え来院した。以前から心電図異常を指摘されていたが精査は受けていない。呼吸数18/分。脈拍72/分、整。血圧130/80 mmHg。頸静脈の怒張はない。収縮期雑音とⅣ音とを聴取する。肺野にラ音を聴取しない。下腿に浮腫を認めない。心エコーの左室長軸断層像(別冊No. 13A)と僧帽弁のMモード像(別冊No. 13B)とを別に示す。

この患者の適切な治療薬はどれか。

(1)　利尿薬

(2)　ジギタリス

(3)　カルシウム拮抗薬

(4)　β受容体遮断薬

(5)　昇圧薬

a　(1)、(2)　　b　(1)、(5)　　c　(2)、(3)　　d　(3)、(4)　　e　(4)、(5)

別　冊
No. 13　写真A、B

21　54歳の男性。今朝から意識レベルが低下し、言葉がもつれるようになり来院した。10年前に健康診断で高血圧と言われたが放置していた。1年前に血圧190/122 mmHgと尿蛋白2＋とを指摘された。4か月前から時々鼻出血が出現していた。最近、頭痛と全身倦怠感とが出現し次第に増悪してきた。体温36.4℃。脈拍86/分、整。血圧260/180 mmHg。項部硬直はない。心尖部にⅣ音を聴取する。腹部に血管雑音はない。下腿に浮腫を認めない。尿所見：蛋白3＋、糖(±)、沈渣に赤血球70～80/1視野、顆粒円柱10～20/1視野。血清生化学所見：尿素窒素72 mg/dl、クレアチニン4.2 mg/dl。心電図(**別冊No. 14A**)と眼底写真(**別冊No. 14B**)とを別に示す。

考えられるのはどれか。

(1)　髄膜炎

(2)　高血圧性脳症

(3)　悪性腎硬化症

(4)　心肥大

(5)　眼内炎

a　(1)、(2)、(3)　　b　(1)、(2)、(5)　　c　(1)、(4)、(5)

d　(2)、(3)、(4)　　e　(3)、(4)、(5)

別　冊

No. 14　図A、写真B

22　2歳の女児。2日前から38℃の発熱が持続し、嘔吐と左上下肢のけいれんとが出現したので来院した。生後6か月にFallot四徴症の診断で短絡手術を受けた。来院時けいれんは消失しているが、左上下肢をうまく動かせない。血液所見：赤沈20 mm/1時間、赤血球550万、Hb 14.3 g/dl、Ht 50%、白血球13,600(桿状核好中球18%、分葉核好中球44%、単球8%、リンパ球30%)。CRP 7.2 mg/dl(基準0.3以下)。

この病態でみられる症候はどれか。

(1)　ばち指

(2)　下腿浮腫

(3)　眼球突出

(4)　Babinski徴候

(5)　Kernig徴候

a　(1)、(2)、(3)　　b　(1)、(2)、(5)　　c　(1)、(4)、(5)

d　(2)、(3)、(4)　　e　(3)、(4)、(5)

23　58歳の男性。歩行時の右下肢疼痛を訴えて来院した。2年前から300 mの歩行で右殿部から下肢にかけて痛みを自覚するようになった。痛みのために次第に歩行可能距離は短くなり、最近では安静時にも疼痛が出現するようになった。右下肢は冷たく足背動脈の脈拍動は触知しない。脈拍74/分、整。血圧160/88 mmHg。血液所見：赤血球450万、Hb 13.2 g/dl、Ht 43%、白血球6,800。骨盤部の動脈造影写真（別冊No. 15A）とその6秒後の写真（別冊No. 15B）とを別に示す。

この患者の適切な治療方針はどれか。

a　血栓溶解療法

b　経皮的血管形成術

c　腰部交感神経節切除術

d　腹部大動脈人工血管置換術

e　腹部大動脈–右大腿動脈バイパス術

別　冊
No. 15　写真A、B

24　生後3時間の新生児。在胎40週、体重2,400 gで出生した。直後から泡沫状の唾液が口腔内から出ている。5%糖液を経口投与したところ、咳込んで嘔吐し、チアノーゼを呈した。

診断のためにまず行うのはどれか。

a　ネラトンカテーテル経鼻挿入

b　腹部超音波検査

c　腹部単純CT

d　食道造影

e　食道内視鏡検査

25　45歳の女性。上腹部不快感を訴えて来院した。最近3か月で2 kgの体重減少がある。身長154 cm、体重43 kg。表在リンパ節は触知しない。眼瞼結膜に軽度貧血を認める。心窩部に軽度の圧痛がある。血液所見：赤血球340万、Hb 11.4 g/dl、Ht 33%、白血球4,500、血小板21万。上部消化管造影写真（別冊No. 16A）と胃内視鏡写真（別冊No. 16B）とを別に示す。

最も考えられるのはどれか。

a　急性胃炎

b　胃潰瘍

c　Ⅱc型早期胃癌

d　4型胃癌

e　胃肉腫

別　冊
No. 16　写真A、B

26　55歳の男性。食後の冷汗と動悸とを主訴に来院した。4か月前に胃癌で胃全摘術を受けた。2か月前から食後2時間ころに冷汗と動悸とが出現するようになった。最近は手がふるえ、気が遠くなることもある。身長172 cm、体重55 kg。脈拍72/分、整。血圧138/74 mmHg。眼瞼結膜に軽度貧血を認める。腹部正中線上に手術痕を認めるが、圧痛はない。下腿に浮腫はない。

この病態に最も関与するのはどれか。

a　甲状腺ホルモン

b　副甲状腺ホルモン

c　インスリン

d　アドレナリン

e　レニン

27　58歳の男性。3日前から肛門部異和感と肛門部痛とが出現し、昨夜から肛門部痛が増強してきたので来院した。5年前から時々排便時に出血を認めていたが放置していた。身長162 cm、体重54 kg。脈拍84/分、整。血圧128/78 mmHg。血液所見：赤血球450万、Ht 38%、白血球9,800。肛門部の写真(別冊No. 17)を別に示す。

最も考えられるのはどれか。

a　肛門周囲膿瘍

b　痔　瘻

c　裂　肛

d　痔核嵌頓

e　直腸脱

別　冊
No. 17　写　　真

28　26歳の女性。皮膚の黄染を主訴に来院した。3日前に37.6℃の発熱、全身倦怠感および食思不振が出現し、尿が褐色になった。今朝、皮膚の黄染に気付いた。この6か月性的接触はない。飲酒歴はない。皮膚と眼球結膜とに黄染を認める。肝を右肋骨弓下に3 cm触知する。血清生化学所見：総ビリルビン6.2 mg/dl、直接ビリルビン4.8 mg/dl、AST〈GOT〉720単位(基準40以下)、ALT〈GPT〉960単位(基準35以下)。免疫学所見：IgM-HA抗体陽性、HBs抗原陰性、HCV抗体陰性。

この疾患で正しいのはどれか。

a　垂直感染する。

b　主に血液を介して感染する。

c　慢性化しない。

d　劇症化しない。

e　肝癌が高頻度に発生する。

29　48歳の男性。昨夕から持続する上腹部痛と意識混濁とのため救急車で搬入された。25歳から飲酒を開始し、最近は毎日焼酎を4合以上飲んでいた。傾眠状態。皮膚に黄疸がある。圧痛のある硬い肝を右肋骨弓下に4 cm触知する。血液所見：赤血球365万、Hb 13.5 g/dl、白血球12,000、血小板12万。血清生化学所見：総蛋白6.5 g/dl、アルブミン3.1 g/dl、総ビリルビン4.5 mg/dl、AST〈GOT〉250単位(基準40以下)、ALT〈GPT〉110単位(基準35以下)、アルカリホスファターゼ570単位(基準260以下)、γ-GTP 350単位(基準8～50)。診断確定のため肝生検を行った。

この疾患の肝組織所見で特徴的なのはどれか。

(1)　リンパ球浸潤

(2)　好中球浸潤

(3)　脂肪沈着

(4)　Mallory小体

(5)　胆管増生

a　(1)、(2)、(3)　　b　(1)、(2)、(5)　　c　(1)、(4)、(5)

d　(2)、(3)、(4)　　e　(3)、(4)、(5)

30　生後47日の乳児。黄疸を主訴に来院した。日齢4から黄疸が出現し、1か月健康診査でも黄疸を指摘された。母乳栄養で、哺乳は良好である。灰白色便が見られる。血清生化学所見：総ビリルビン12.5 mg/dl、直接ビリルビン6.7 mg/dl、AST〈GOT〉244単位(基準40以下)、ALT〈GPT〉136単位(基準35以下)。

この患児で欠乏するのはどれか。

a　ビタミンB_2

b　ビタミンC

c　ビタミンD

d　葉　酸

e　ビオチン

31　39歳の男性。朝食前に強いめまいがあり来院した。6か月前から食事前になると動悸とめまいとを感じていた。最近、食欲は亢進気味で肥満の傾向がある。身長165 cm、体重70 kg。眼瞼結膜に貧血を認めない。血液所見：赤血球445万、Hb 14.5 g/dl、Ht 43%、白血球6,300、血小板21万。血清生化学所見：空腹時血糖46 mg/dl、総蛋白7.4 g/dl、アルブミン4.5 g/dl、AST〈GOT〉18単位(基準40以下)、ALT〈GPT〉35単位(基準35以下)。免疫学所見：AFP 11 ng/ml(基準20以下)、CEA 1.6 ng/ml(基準5以下)、CA 19-9 6 U/ml(基準37以下)。腹腔動脈造影写真(**別冊**No. 18)を別に示す。

予想される病態はどれか。

a　高アンモニア血症

b　低カリウム血症

c　高カルシウム血症

d　高ガストリン血症

e　高インスリン血症

別　冊
No. 18　写　　真

32　75歳の女性。3か月前から食欲不振と腹部膨満とがあり、最近増悪してきたので来院した。3年前に進行胃癌の手術を受けた。この3か月で体重が5 kg減少した。上腹部痛はない。全身のやせが著明で腹部は膨隆している。眼瞼結膜は貧血様、頸部にリンパ節は触知しない。腹部に波動を認める。血液所見：赤血球320万、Hb 9.5 g/dl、白血球7,200、血小板46万。

現在の病態把握に最も有用なのはどれか。

a　腹部エックス線単純撮影

b　上部消化管造影

c　小腸造影

d　注腸造影

e　腹部単純CT

33　38歳の男性。6か月前から徐々に進行する動悸と息切れとのため来院した。体格栄養中等度。脈拍90/分、整。血圧128/76 mmHg。四肢に数個の紫斑を認める。頸部リンパ節腫大はない。眼瞼結膜は貧血様であるが、眼球結膜に黄疸はない。胸部所見に異常はなく、腹部は平坦、軟で肝・脾を触知しない。血液所見：赤血球198万、Hb 6.8 g/dl、Ht 22%、白血球2,300、血小板4.5万。血清生化学所見：総蛋白6.5 g/dl、総ビリルビン1.0 mg/dl、AST〈GOT〉45単位(基準40以下)、ALT〈GPT〉30単位(基準35以下)、LDH 770単位(基準176～353)。骨髄血塗抹May-Giemsa染色標本(**別冊**No. 19)を別に示す。

この病態について**誤っている**のはどれか。

a　高齢者に多い。

b　無効造血がある。

c　染色体異常がみられる。

d　急性白血病への移行がある。

e　分化誘導療法の有効性が高い。

別　冊
No. 19　写　　真

34　54歳の男性。3日前からの口渇、悪心および嘔吐を訴えて来院した。1か月前から頸部腫瘤に気付いていた。右頸部と両側腋窩とに2×2 cm大のリンパ節を数個ずつ触知する。皮膚に隆起性の皮疹を多数認める。血液所見：赤血球347万、Hb 10.2 g/dl、白血球9,700、血小板5.8万。末梢血塗抹May–Giemsa染色標本(別冊No. 20)を別に示す。

予想される所見はどれか。

(1)　LDH高値

(2)　高カルシウム血症

(3)　血清可溶性IL-2受容体〈sIL-2R〉高値

(4)　単クローン性高ガンマグロブリン血症

(5)　骨打ち抜き像〈punched–out lesion〉

a　(1)、(2)、(3)　　b　(1)、(2)、(5)　　c　(1)、(4)、(5)

d　(2)、(3)、(4)　　e　(3)、(4)、(5)

別　冊
No. 20　写　　真

35　32歳の女性。皮膚の出血斑を主訴に来院した。5か月前から誘因なく肩や膝に径2～3 cmの皮下出血斑が出現するのに気付いた。2週前から歯磨きで血がにじんだり、入浴時に強くこすった部位に点状出血斑がでるようになった。常用薬はない。貧血、黄疸、リンパ節腫大および肝脾腫を認めない。血液所見：赤沈15 mm/1時間、Hb 10.5 g/dl、白血球4,500、血小板2万、網赤血球15‰。プロトロンビン時間〈PT〉95%(基準80～120)、APTT 33秒(基準対照32.2)、フィブリノゲン243 mg/dl(基準200～400)、FDP 10 μg/ml以下(基準10以下)。血清生化学所見に異常はない。免疫学所見：CRP陰性、抗核抗体陰性、直接Coombs試験陰性。骨髄穿刺所見：有核細胞数は正常。巨核球は増加しているが異型細胞を認めない。

血小板動態がこの疾患と類似するのはどれか。

a　再生不良性貧血

b　悪性貧血

c　骨髄異形成症候群

d　血栓性血小板減少性紫斑病

e　慢性骨髄増殖性疾患

36　16 歳の男子。眼瞼の浮腫と全身倦怠感とを主訴に来院した。これまで健康診断で異常を指摘されたことはない。2 週前に上気道炎に罹患し、4 日前から急に眼瞼の浮腫と全身倦怠感とが出現した。血圧 148/92 mmHg。眼瞼と下腿とに浮腫を認めるほかに身体所見に異常はない。尿所見：蛋白 3 ＋、糖(－)、潜血 3 ＋、沈渣に赤血球多数/1 視野、赤血球円柱 20～30/1 視野を認める。血清生化学所見：総蛋白 6.8 g/dl、クレアチニン 1.5 mg/dl。免疫学所見：ASO 640 単位(基準 250 以下)、抗核抗体陰性、C3 12 mg/dl (基準 55～112)、C4 5 mg/dl (基準 16～51)。腎生検組織の H-E 染色標本(別冊No. 21A)と蛍光抗体法抗 C3 染色標本(別冊No. 21B)とを別に示す。

考えられるのはどれか。

a　IgA 腎症

b　急性糸球体腎炎

c　微小変化群

d　膜性腎症

e　巣状糸球体硬化症

別　冊
No. 21　写真A、B

37　28 歳の女性。高熱と筋肉痛とを主訴に来院した。25 歳時に流産の既往がある。3 日前に海水浴に行き、翌日から 38.6℃ の発熱、下腿浮腫および両頬部を中心とする紅斑が出現した。近医で過度の日焼けと診断され外用療法を受けたが軽快せず、筋肉痛と両側腋窩リンパ節腫脹とが出現した。

予想される検査所見はどれか。

(1)　尿蛋白陽性

(2)　赤沈亢進

(3)　好中球増加

(4)　ASO 陽性

(5)　補体価低下

a　(1)、(2)、(3)　　b　(1)、(2)、(5)　　c　(1)、(4)、(5)

d　(2)、(3)、(4)　　e　(3)、(4)、(5)

38　32 歳の男性。昨夜から右側腹部疝痛発作があり、救急外来を受診した。5 年前に同様の発作があり、ヨード造影剤検査で尿管結石を指摘されたが、その検査中に重度の呼吸困難に陥ったことがある。腹部は平坦、軟であるが、右背部に強い叩打痛がある。尿所見：蛋白(±)、糖(－)、沈渣に赤血球 20～30/1 視野、白血球(－)。血清生化学所見に異常はない。

まず行うべき検査はどれか。

a　腹部超音波検査

b　静脈性腎盂造影

c　腎シンチグラフィ

d　逆行性腎盂造影

e　腎盂尿管鏡検査

39 22歳の女性。月経痛を主訴に来院した。月経は30日型、整。3年前から月経痛をきたすようになった。次第に増強し、最近鎮痛薬を服用している。内診では子宮は正常大で、Douglas窩に圧痛がある。左卵巣の経腟超音波写真(別冊No. 22)を別に示す。

診断に有用なのはどれか。

(1) CA 125測定
(2) 骨盤部単純MRI
(3) 子宮内膜組織診
(4) 選択的腹腔動脈造影
(5) 腹腔鏡

a (1)、(2)、(3)　b (1)、(2)、(5)　c (1)、(4)、(5)
d (2)、(3)、(4)　e (3)、(4)、(5)

別　冊
No. 22　写　真

40 28歳の既婚女性。下腹部膨満感を主訴に来院した。月経28日型、整。月経痛はない。内診で下腹部に新生児頭大の可動性のある腫瘤を触知する。CA 125 24単位(基準35以下)、CA 19-9 98 U/ml(基準37以下)、SCC 1.2 ng/ml(基準1.5以下)。骨盤部単純MRIのT_1強調像(別冊No. 23A)と脂肪抑制T_1強調像(別冊No. 23B)とを別に示す。

最も考えられるのはどれか。

a 卵胞嚢胞
b チョコレート嚢胞
c 漿液性嚢胞腺腫
d 粘液性嚢胞腺腫
e 成熟嚢胞性奇形腫

別　冊
No. 23　写真A、B

41 52歳の女性。6か月前からの発汗と不眠とを主訴に来院した。血圧128/62 mmHg。血清生化学所見：総コレステロール190 mg/dl、トリグリセライド110 mg/dl(基準50～130)。LH 48 mIU/ml(基準2.1～7.0)、FSH 94 mIU/ml(基準4.4～8.6)、プロラクチン7.4 ng/ml(基準15.0以下)、free T_4 1.2 ng/dl(基準0.8～2.2)、エストラジオール10 pg/ml以下(基準25～75)。

適切な治療はどれか。

a ホルモン補充療法
b クロミフェン投与
c hMG-hCG投与
d ブロモクリプチン投与
e GnRHアゴニスト投与

42　72歳の男性。自宅のトイレで倒れているところを発見され、救急車で搬送された。来院時呼名に応じていたが、次第に意識レベルが低下し、昏睡状態となった。来院時の頭部単純CT(別冊No. 24)を別に示す。

来院後の意識状態悪化の原因として考えられるのはどれか。

(1)　急性水頭症

(2)　正常圧水頭症

(3)　急性硬膜下血腫

(4)　急性硬膜外血腫

(5)　脳動脈瘤破裂

a　(1)、(2)　　b　(1)、(5)　　c　(2)、(3)　　d　(3)、(4)　　e　(4)、(5)

別　冊
No. 24　写　真

43　59歳の男性。昨日から右半身が使いにくくなり家族に連れられて来院した。1か月前から時々血痰があり、この半年で体重が4 kg減少した。数日前から頭痛を訴え、次第に増悪し、昨日全身けいれんが出現した。意識は清明。聴診上、左肺野で呼吸音の減弱を認める。項部硬直はない。右半身に不全片麻痺と感覚鈍麻とを認める。眼底にうっ血乳頭がみられる。

最も考えられるのはどれか。

a　髄膜腫

b　聴神経腫瘍

c　神経膠腫

d　下垂体腺腫

e　転移性脳腫瘍

44　10歳の男児。学習の遅れと視覚障害とが顕著になったため来院した。4か月前からボールの捕球が困難になり、またピアノの楽譜を読めなくなった。記憶力が低下し、算数の図形の問題が苦手となった。運動自体や感情面に問題はない。三種混合と麻疹ワクチンとは接種済みである。意識は清明。自分の名前と年齢とを言える。手掌と足底とを除いて全身皮膚に色素沈着がある。心雑音は聴取せず、ラ音も聴取しない。腹部は平坦で軟、肝・脾は触れない。深部腱反射は亢進し、Babinski徴候は陽性である。手の変換運動は良好で、片足立ちは可能である。血清生化学所見：総蛋白7.1 g/dl、アルブミン4.7 g/dl、尿素窒素11 mg/dl、AST(GOT)33単位(基準40以下)、ALT(GPT)35単位(基準35以下)、LDH 548単位(基準176～353)。頭部単純MRIのT_1強調像(別冊No. 25A)とT_2強調像(別冊No. 25B)とを別に示す。

考えられるのはどれか。

a　脳梗塞

b　脳出血

c　脳腫瘍

d　亜急性硬化性全脳炎

e　副腎白質ジストロフィー

別　冊
No. 25　写真A、B

45　25歳の女性。頭痛を主訴に来院した。15歳ころから月に1回程度の頻度で、片側の拍動性頭痛がみられ、半日くらいで軽快していた。頭痛直前に視覚障害と、頭痛時に嘔吐と流涙とを伴うという。来院時、頭痛はなく、意識は清明である。一般身体所見と神経学的所見とに異常はない。

最も考えられるのはどれか。

a　片頭痛

b　群発頭痛

c　緊張性頭痛

d　三叉神経痛

e　てんかん

46　56歳の女性。歩行時に右母趾中足趾節関節の内側部の痛みと突出とを訴えて来院した。母趾は腓骨側に弯曲し、第2趾と重なっている。安静時の痛みはない。

考えられるのはどれか。

a　扁平足

b　外反母趾

c　屈筋腱断裂

d　痛風性関節炎

e　第1中足骨骨折

47　48歳の女性。2、3年前から歩行障害が出現し、最近、悪化したため来院した。意識は清明で、知的機能低下はない。構音障害、眼振、運動失調および四肢の感覚鈍麻と筋力低下とを認める。頭頸部MRIのT_1強調矢状断像(別冊No. 26)を別に示す。

MRIでみられるのはどれか。

(1)　髄膜瘤

(2)　頭蓋咽頭腫

(3)　Chiari奇形

(4)　頭蓋底陥入症

(5)　Klippel-Feil症候群

a　(1)、(2)　b　(1)、(5)　c　(2)、(3)　d　(3)、(4)　e　(4)、(5)

別　冊

No. 26　写　真

48　53歳の男性。後頸部激痛と急性四肢麻痺とを主訴に来院した。10年前から糖尿病で食事療法中である。3週前に40℃の発熱と頸部痛とがあり、2週前に他院で頸部エックス線撮影の結果、頸椎症と診断された。しかし、疼痛の増悪と共に四肢は不全麻痺の状態となり、昨日から歩行困難となった。四肢深部腱反射の亢進と第6頸髄高位以下の感覚鈍麻とを認める。体温37.5℃。血液所見：赤血球421万、白血球12,500。CRP 6.0 mg/dl（基準0.3以下）。2週前と初診時との頸椎エックス線単純写真（別冊No. 27A、B）を別に示す。

抗菌薬投与に続く、最も適切な治療法はどれか。

a　歩行訓練

b　頸椎カラー装着

c　頭蓋直達牽引

d　後方除圧術

e　前方固定術

別　冊
No. 27　写真A、B

49　32歳の女性。1年前から月経不順、顔面に痤瘡が多数出現し、口の周囲や下顎に濃い剛毛が生えるようになったため来院した。身長156 cm、体重64 kg。血圧162/94 mmHg。満月様顔貌、中心性肥満、赤色皮膚線条および多毛を認める。血中コルチゾールと尿中17-OHCSとは高値で、デキサメサゾン2 mg/日投与では抑制されなかったが、8 mg/日投与で抑制された。

この患者で**みられない**のはどれか。

a　血中デヒドロエピアンドロステロン（DHEA）低下

b　メトピロン負荷試験で尿中17-OHCS増加

c　CRH試験で血中ACTH上昇

d　下垂体腫瘍

e　両側副腎肥大

50　40歳の男性。四肢と頸部との筋力低下を主訴に来院した。以前から拡張期高血圧を指摘されていたが、自覚症状がないため放置していた。血圧140/98 mmHg。血清生化学所見：Na 142 mEq/l、K 2.3 mEq/l、Cl 102 mEq/l。血漿レニン活性（PRA）0.1 ng/ml/時間以下（基準1.2～2.5）。

この患者の診断で**否定できる**のはどれか。

a　原発性アルドステロン症

b　Bartter症候群

c　Liddle症候群

d　11 β-hydroxylase欠損症

e　17 α-hydroxylase欠損症

51　52歳の男性。口渇、多飲および多尿を主訴に来院した。父、姉および父方叔父に糖尿病がある。5年前に健康診断で高血糖を指摘されたが放置している。最近運動不足気味で、外食することが多い。身長170 cm、体重82 kg。血圧132/78 mmHg。尿所見：蛋白（－）、糖2＋。血清生化学所見：空腹時血糖192 mg/dl、HbA_{1c} 8.8%（基準4.3～5.8）、総蛋白6.8 g/dl、アルブミン4.6 g/dl、尿素窒素12 mg/dl。

この疾患で正しいのはどれか。

a　発症には自己免疫機序が関与する。

b　HLAとの関連が認められる。

c　ケトアシドーシスを起こしやすい。

d　インスリン注射療法の絶対適応である。

e　生活習慣の是正が有効である。

52　46歳の男性。昨夕からの右足母趾の基部の激しい痛み、発赤および腫脹を主訴に来院した。3か月前の健康診断では尿糖(−)、尿蛋白(−)、空腹時血糖118 mg/dl、総コレステロール208 mg/dl、尿素窒素17 mg/dl、尿酸9.8 mg/dl であった。

この患者にまず行うべき治療はどれか。

a　副腎皮質ステロイド薬の経口投与

b　非ステロイド性抗炎症薬の経口投与

c　アロプリノールの経口投与

d　経口血糖降下薬の投与

e　局所麻酔薬の関節内注射

53　12歳の男児。遠足の山道でハチに刺されて来院した。体温37.2℃。脈拍86/分、整。血圧94/46 mmHg。右腕に刺傷部が2か所あり、右腕全体に発赤、疼痛、腫脹および熱感を認める。血液所見：赤血球420万、Hb 12.4 g/dl、Ht 42%、白血球9,800、血小板32万。血清生化学所見：尿素窒素12 mg/dl、クレアチニン0.8 mg/dl、AST〈GOT〉32単位(基準40以下)。CRP 3.2 mg/dl (基準0.3以下)。

この疾患で正しいのはどれか。

(1)　ハチ毒ではスズメバチが最も強い。

(2)　気道狭窄を起こすことがある。

(3)　減感作療法は無効である。

(4)　刺傷歴を重ねるごとに軽症となる。

(5)　RAST〈radioallergosorbent test〉は診断に有用である。

a　(1)、(2)、(3)　　b　(1)、(2)、(5)　　c　(1)、(4)、(5)

d　(2)、(3)、(4)　　e　(3)、(4)、(5)

54　52歳の女性。Raynaud現象と指先潰瘍とを主訴に来院した。数年前から手指のRaynaud現象が出現している。今年の冬に右示指と中指との先端に潰瘍が生じ、治らなくなった。意識は清明。両手指から手背にかけての浮腫状硬化と前胸部の斑状色素脱失とを認める。右示指と中指との先端に小潰瘍と陥凹性瘢痕とを認める。血液所見：赤沈64 mm/1時間、赤血球320万、Hb 10.0 g/dl、白血球5,600、血小板24万。血清生化学所見：尿素窒素12 mg/dl、クレアチニン0.8 mg/dl、AST〈GOT〉36単位(基準40以下)、アルカリホスファターゼ220単位(基準260以下)。CRP 0.2 mg/dl (基準0.3以下)、抗核抗体160倍(基準20以下)。

この疾患の診断に最も有用な自己抗体はどれか。

a　抗dsDNA抗体

b　抗Jo-1抗体

c　抗Scl-70抗体

d　抗ミトコンドリア抗体

e　リウマトイド因子

55　50歳の男性。数日前からの右眼の視力低下と痛みとを主訴に来院した。視力は右0.3(矯正不能)、左1.2(矯正不能)。右前眼部写真(別冊No. 28A)とフルオレセイン生体染色前眼部写真(別冊No. 28B)とを別に示す。左眼に異常はみられない。

この疾患でみられるのはどれか。

a　散　瞳

b　角膜知覚低下

c　前(眼)房混濁

d　水晶体混濁

e　眼圧上昇

別　冊
No. 28　写真A、B

56　10歳の男児。発熱、悪心および嘔吐を主訴に来院した。春休みに5日間東南アジアを家族と旅行し、帰国後も通常生活を送っていた。帰国後1か月ころから37～38℃の発熱が4日間続き、同時に全身倦怠感、食欲不振、悪心および嘔吐があり、褐色の濃い尿が出るようになった。眼球結膜は黄染し、腹部は平坦で右肋骨弓下に肝を3 cm触知する。

最も考えられるのはどれか。

a　デング熱

b　A型肝炎

c　コレラ

d　病原性大腸菌感染症

e　フィラリア症

57　29歳の女性。1週前からの発熱と咳とを主訴に来院した。前医での胸部エックス線撮影で肺炎と診断され、セフェム系抗菌薬を4日間投与されたが解熱せず、肺野の浸潤影も悪化した。紹介状によれば喀痰培養では正常菌叢であった。体温39.2℃。呼吸数20/分。脈拍94/分、整。血圧106/64 mmHg。血液所見：赤血球420万、白血球8,000。血清総蛋白7.0 g/dl。CRP 7.0 mg/dl(基準0.3以下)。

可能性の高い起因菌はどれか。

(1)　インフルエンザ菌

(2)　肺炎桿菌

(3)　肺炎球菌

(4)　レジオネラ

(5)　マイコプラズマ

a　(1)、(2)　b　(1)、(5)　c　(2)、(3)　d　(3)、(4)　e　(4)、(5)

58　54歳の女性。早朝から腹痛、嘔吐および頻回の下痢が出現し来院した。一昨日夕食にすき焼きと生卵とを食べた。夫にも同様の症状がある。体温37.6℃。脈拍88/分、整。腹部全体に腸雑音の亢進がある。血液所見：赤血球395万、Hb 12.9 g/dl、Ht 39%、白血球9,900、血小板26万。CRP 5.2 mg/dl(基準0.3以下)。

最も考えられる起因菌はどれか。

a　カンピロバクター

b　病原性大腸菌

c　ブドウ球菌

d　サルモネラ

e　腸炎ビブリオ

59　8か月の乳児。3週前から咳が出現し、3日前から発熱があり来院した。同居している祖父が数か月以上前からよく咳込んでいた。三種混合とポリオワクチンとは接種済みであるがBCGは未接種である。体温38.4℃。呼吸数34/分。脈拍140/分、整。肺野にラ音は聴取されない。頸部リンパ節を触知する。肝を3 cm、脾を2 cm弾性軟に触知する。血液所見：赤沈41 mm/1時間、赤血球480万、Hb 13.2 g/dl、白血球16,300(桿状核好中球4%、分葉核好中球24%、好酸球4%、好塩基球1%、単球11%、リンパ球56%)。CRP 3.8 mg/dl(基準0.3以下)。胸部エックス線写真(別冊No. 29)を別に示す。

最も考えられるのはどれか。

a　急性細気管支炎

b　クラミジア肺炎

c　ブドウ球菌性肺炎

d　粟粒結核

e　サルコイドーシス

別　冊
No. 29　写　真

60　60歳の男性。炎天下、人ごみのなかで立ったまま祭り見物をしていた。急に気分が悪いと訴え、近くにいた人に連れられて来院した。体温37.6℃。脈拍98/分、整、微弱。血圧108/80 mmHg。皮膚は蒼白で、じっとりとしている。心電図には洞性頻脈以外に異常はない。

適切な処置はどれか。

(1)　涼しい部屋で仰臥位にさせる。

(2)　乳酸加リンゲル液を点滴静注する。

(3)　塩化カリウムの錠剤を投与する。

(4)　ジアゼパムを静注する。

(5)　昇圧薬を投与する。

a　(1)、(2)　　b　(1)、(5)　　c　(2)、(3)　　d　(3)、(4)　　e　(4)、(5)

◎　下記の欄に受験番号および氏名を記入すること。

受　験　番　号	氏　名（楷　書　で　書　く　こ　と）